

『安楽椅子探偵アーチャー』

松尾 由美／著 東京創元社（2003年）

小学生の衛^{まもる}は、誕生日当日にプレゼントの用意ができなかったから自分でゲームを買ってとお母さんにお金を渡された。衛は普段持ち歩かない大金を手にとドキドキしながらゲームを買いに行く途中、骨董屋の店先で気になる安楽椅子にであった。どうやらこの安楽椅子は話ができるみたいだ。ゲームを買うお金で安楽椅子を買った衛は、日常の不思議な出来事を安楽椅子に話す。すると安楽椅子は鮮やかに謎解きをしてくれるのだった。

『腕貫探偵 市民サービス課出張所事件簿』

西澤 保彦／著 実業之日本社（2005年）

「市民サービス課臨時出張所

櫃洗市^{ひつあらい}のみなさまへ

日頃のご意見、ご要望、なんでもお聞かせください
個人的なお悩みもお気軽にどうぞ

櫃洗市一般苦情係」

そんな張り紙をした簡易机に無表情な男が座っている。丸いフレームのメガネ、白シャツ。そして、両腕には黒い腕貫きをしている。こんな男に相談しても無理だと思いながら、事件の概要^{がいよう}を喋ると、表情を微塵^{みじん}も変えず事件を真相へと導いていきます。

7つの短編になっています。

『黒後家蜘蛛の会1(新版)』

アイザック・アシモフ／著 池 央耿／訳
東京創元社（2018年）

^{ブラック・ワイドワーズ}
「黒後家蜘蛛の会」と呼ばれる例会は、月に一度開かれていた。今回初めて会にきた男、私立探偵のバートラムはある事件のことを話し始めた。アンダースンという男がジャクスンという誰よりも正直な男にあるものを盗まれたという。しかしアンダースンには収集癖があり、家の中はものであふれているため何を盗まれたのかわからないのだ。

シリーズ一作目「会心の笑い」ほか11編を収録したミステリー短編集。

『ママは何でも知っている』

ジェイムズ・ヤッフェ／作 小尾 芙佐／訳
早川書房（2015年）

刑事のデイビッドは、毎週金曜日、妻のシャーリィとともにママを訪れます。ママは、ディナーの席で、デイビッドが現在捜査中の事件の話をお聞きたがりません。ママは、現場を見ることもなく、デイビッドが話すことに耳を傾け、いくつか質問をするだけで、警察さえ解決できない事件の真相を見抜いてしまうのでした。

この本では、8編の短篇が収録されています。ママのディナーとともに、家族のユーモラスな会話と極上の謎を召し上がれ。

『謎解きはディナーのあとで』

東川 篤哉／著 小学館（2010年）

世界的に有名な宝生グループ^{ほうしょう}の令嬢^{れいじょう}の麗子は新人刑事として働いています。上司は中堅自動車メーカーの御曹司^{おんぞうし}。いまいち勘の悪いこの警部のもとで麗子は奮闘しますが、難解な事件では執事の影山に助言を求めます。「お嬢様の目は節穴でございますか」毒舌な影山に丁寧な口調で腹立たしいことを言われながらも、一緒に事件を解決していきます。

2011年の本屋大賞に選ばれて、ドラマや映画にもなったユーモアたっぷりの人気作品です。

『火曜クラブ』

アガサ・クリスティー／著 中村 妙子／訳
早川書房（2003年）

ミス・マーブルの見かけは穏やかなおばあちゃんです。初めは見くびられますが、物語の終わりには、その優れた洞察力と推理力^{どうさつりょく}に登場人物みんなが脱帽してしまいます。ミス・マーブルの最大の特徴は、依頼者などから語られる事件のあらましを、自身の過去の経験に当てはめて推理するところにあります。実際に現場に赴かずとも、すらすらと真実を言い当てる、これぞ安楽椅子探偵！ミス・マーブルの活躍をお楽しみください。